



エレクトロヒートセンターから 世界へ

松井 宏司 一般社団法人
日本エレクトロヒートセンター 理事

いきなりスポーツの話題で恐縮ですが、日本でのワールドカップブラジル大会の盛り上がりは今ひとつだったように思います。理由は日本チームの1次リーグ敗退、それも1勝もできずの惨敗だったからでしょう。その一方で、世界的に評価されたのは南米チーム群でした。6代表の内5代表が決勝トーナメントに進出し、なかでもチリの活躍は日本にとってとても参考になったと思います。チリチームの平均身長は175.9cmと178cmの日本より低く、スーパースターもいませんでしたが、堅守速攻で決勝トーナメントへ勝ち上がりました。

ある解説者によると、日本とチリの差は日頃の叩かれ方の違いにあるとのこと。日本はぬるま湯に浸かったままのJリーグ、親善試合で海外勢と対戦するものの相手チームは真剣にならず手の内は見せません。たまにアジアカップなどで韓国、イランなどアジア地域の競合国と対戦するのみでは、世界基準で自軍の守備、攻撃レベルなどを測るのが難しいとのこと。

一方チリはブラジル、アルゼンチンなど常に南米強豪との真剣勝負の機会が多く、常に叩かれます。身長も高くなくスーパーフォワードもないので、戦術としては、とにかく足を使ったしつこく堅実な守備で相手を攻め込ませず、一端ボールを奪ったら速攻で相手のゴールに迫る戦法しかありません。でもチームに染みつけた意識と戦術の徹底により、選手はやるべきことが明確になっている分思い切りが良く、意識のベクトルも合っているので攻撃のタイミングも揃うのでしょう。

前置きが長くなってしまいましたが、ここで言いたかったのは、日頃から緊張感を保ちつつ世界基準で戦っていれば自分の立ち位置を把握でき、何が通用して何が課題なのか、が明確になって来るので戦術も立てやすく、W杯でのチリのように世界の大舞台で十分に自分の力を発揮でき結果も付いてくるのではないかと、いうことでした。

ところで、日本の技術は「現場」に牽引されているとよく言われます。全くその通りで、現場の改善やちょっとした工夫、精緻な作り込みなどがいわゆる「日本品質」を作り上げています。その一例として高難度の金属加工があり、それを支えるのが高度な熱処理技術です。そして最近では環境保護や省エネルギーの観点から、誘導加熱や輻射加熱など電気加熱による熱処理が主流になってきています。さらに熱処理は金属だけでなく食料品や炭素繊維などにも応用されており、本号でも特集されているとおりです。これらの高度技術がさらに日本の技術優位性を高め、製品競争力を高めていくと考えられます。電気を上手に使い、金属その他の材料の熱処理技術を追求することで、日本の国際競争力を高め続けて欲しいと思います。

そのためには日頃から国内に留まらず世界規模での切磋琢磨が重要で、国内業界全体のレベルアップと世界に向けた積極的な情報発信がとても大切だと思います。日本の中だけでパイを分け合っている、所詮市場は限られているからです。そういった意味で、今後私たちエレクトロヒートセンターには、エレクトロヒートに特化したユニークな機関誌をはじめとして、世界に向けての情報発信源としてより存在感のある活動が求められてくると強く認識している今日この頃です。

(まつい ひろし) 大同特殊鋼株式会社 機械事業部 設計部 部長